

理想を求めて

足跡をたどる

神話カルロス・クライバー — 理想を求めて

カルロス・クライバーはなぜ、大いなる謎の人物になったのか

アレクサンダー・ヴェルナー寄稿

雑誌「楽譜」2007年10月13日号掲載

以下の本の出版を前に。

アレクサンダー・ヴェルナー著「カルロス・クライバー ある天才指揮者の伝記」

ショット・ミュージック社2007年12月

[ダウンロード](#)

8ページの写真の説明に関しては、残念ながら何も修正できなかった。

ホメイニーではなく、バグワンとすべきところである。

理想を求めて

文▶アレクサンダー・ヴェルナー

1955年2月ポツダム。カール・ケラーは極度に緊張して、ハンス・オットー劇場のオーケストラ席へと向かった。初めて、ある戯曲を指揮するためであった。カール・ミレッカーのオペレッタ「ガスパローネ」である。彼の背後には難題がある。オーケストラは初め、この未熟な指揮者に従うことに抵抗を感じていた。アンサンブルへの紹介では、控えめで、親しげで、大柄で、見栄えがし、軽いなまりのあるこの24歳の男は、アメリカ出身の人材となっていた。劇場の支配人イルゼ・ヴァイントラウトだけが、その仮名の背後に誰が隠れているか知っていた。20世紀前半の最もすぐれた指揮者と、多くの人々が評するエーリヒ・クライバーの息子だったのである。聴衆は高揚した初演に喝采した。さらには、身分を隠して2回目の上演に訪れた父親も、息子の出来栄に満足した様子であった。しかし、カルロス・クライバーが20世紀後期において、最も賞賛される指揮者に上り詰めることになろうとは、まだ誰も予感していない。

アメリカ出身のカール・ケラー

エーリヒ・クライバーは、かつてベルリン国立歌劇場の音楽監督であったが、1935年春、家族とともにナチス・ドイツに背を向けた。その時から亡命中、とりわけブエノスアイレスのテアトロ・コロンのや、モンテビデオにおいて、大好評の成果を収めた。すでに終戦直後には、当時廃墟と化していたベルリンのかつての劇場に、この著名な男を連れ戻そうとする努力がなされていた。クライバー自身も実際に1955年、音楽監督として再建された国立歌劇場の落成式を行うつもりであった。息子カルロスを彼は東ベルリンに連れて行った。1926年にブエノスアイレスで知り合い、その直後に結婚していた、カリフォルニア出身の妻ルースも連れて行った。

ポツダムでのカルロスの取り組みが、現実には決して予測できない人物、エーリヒ・クライバーを、よりしっかりと東ベルリンにつなぎ止めるように、東ドイツの文化省を導いていた。しかしそれから、クライバー一家は全く思いがけず、東ドイツを後にした。エーリヒ・クライバーは、東西間に文化の橋を架けることができると期待していたが、夢から覚めて、自ら政治に深く巻き込まれたことに気づいた。

カルロス・クライバーにとって、指揮者として定期的に劇場で指揮することができる希望は、さしあたり消えた。そのうえ時間が切迫していた。というのも、何年も亡命して放

浪していたために、彼の音楽的成長が遅れていたからである。1930年7月3日ベルリンに生まれたカール・ルートヴィヒ・ボニファツィウス・クライバーには、音楽に対する愛着が早くに目覚めていたのは確かである。さらに、彼の才能がすぐに見出されていたのも間違いない。しかし、彼と、2歳違いの姉ヴェロニカとが、守られた幼年時代を授かった歳月は、短い間にすぎなかった。その後は放浪の時代であった。一家はオーストリアのモンツェーに移り住み、その後ルガーノ、モンテカルロ、ジュネーヴ、そしてついに1940年、南米に移り住んだ。

クライバー親子には、平凡さはない！

チリ、キューバ、ニューヨークで、厳格に営まれた名門の全寮制学校にあって、家族とともに生活できないのを痛いほど寂しく思いながら、何年も過ぎ去った。カールは当時、友人や家族との間でカルロスと呼ばれていた。子どもの時に、すでに彼は作曲した。15歳になって（初めて）、父の希望に従って、ピアノとティンパニの授業を受け始めた。1946年と1947年の休暇の際、テアトロ・コロンド、父の指揮するワーグナーの演奏の跡を、高揚しながら追った時に、自分も指揮者になるという願いが実った。父はその間、息子の動きを心配して見守った。戦後の困難な時代にあつて、息子には金にならない芸術に身を委ねてほしくなかった。その上、いかなる重荷を自ら息子に示しているのか、父にはよくわかっていて。そして父はカルロスに、平凡であるようにと、厳命したのであるが、クライバーという人には平凡さは許されなかった。カルロスは、天才的な完全主義者である父を範とした。そしてその父というのは、音楽における要求を容赦なく貫徹する人であり、楽譜をこの上なく徹底的に研究し、吟味を重ねた後で、音楽を魅力的に開花させ、燃え上がるように躍動させる人だったのである。

若きクライバーは、首尾一貫してわが道を行つた。たしかに彼は1949年に一学期間、チューリッヒの連邦工科大学で化学を学んだ。職業において確実な基盤を手にするようにと、父が主張したからである。しかしその後、エーリヒ・クライバーは譲歩し、1950年ブエノスアイレスで、最高の教師たちを息子に世話した。一つだけ父子の関係を損なつたのは、嫌いなピアノにカルロスが反抗し、初めのうちは、自分の才能を教師たちに認めさせることができなかつたのである。父が熱心に彼の良心に訴えて初めて、彼はぐんぐん進歩を遂げた。1952年ラプラタの劇場で、補助として、舞台上で最初の経験を積むことができた。誇りに思つた父は、助けられる時にのみ息子を助けた。

足跡をたどる

彼は指揮者のなかでも、紛れもなく神話である。カルロス・クライバー(1930 — 2004)、その人である。彼のコンサートでは、ボルテージが火花を散らし、オーケストラと聴衆は、文字通り感電したように感じた。しかし完全主義者の彼は、「ビジネス」を忌み嫌った。彼はもはや、めったに姿を現さなくなった。公衆の目に触れるのを、彼は完全に拒絶した。

カルロスの父エーリヒ・クライバー(1890 — 1956)は、20世紀の偉大な指揮者の一人とされている。左の写真は、1930年に妻ルースと。右の写真は、1931年に幼いカールと。右のページの写真：カルロス・クライバーは、いかなる洒落をするにももったいない人物だ。謝肉祭に際し、彼はオペレッタ「こうもり」の第3幕に、オペラ席でホメイニーの役で登場した。

レパートリーの克服

エーリヒ・クライバーは、すでにヨーロッパに引き揚げており、カルロスも父のあとについてミュンヘンに行った。ミュンヘンでは、1952年から1953年にかけての音楽祭で、父がお祝いされた。カルロス・クライバーは、ゲルトナー広場劇場で2年間、大した喜びを感じることなく、コレペティートル(音楽稽古をつけるピアニスト)を務めた。それからポツダムで間奏曲の後、1956年にウィーン・フォルクスオーパー歌劇場で、そして1957年夏の終わり頃からは、ライン河畔ドイツ・オペラで、さほど喜びが高まらないまま、コレペティートルとしての活動を続けた。しかし、コレペティートルを務めたこの数年間に、音楽にとりつかれたこの若者は、レパートリーの知識を十分に授かった。そしてついに1960年、デュッセルドルフのデュースブルクで、オペラ「椿姫」の初演の後、指揮者へ昇格することができたのである。もっとも、ハンブルクとザルツブルク国立劇場での上演は母が仕掛けたものだが、これをもって彼は、躊躇するライン・オペラの支配人ヘルマン・ユーフに、少し圧力をかけていた。エーリヒ・クライバーは1956年に急逝しており、息子はもはや、一人で道を切り開いて行かねばならなかった。

カールは今や公式にも、カルロス・クライバーと名のついていた。彼は1964年半ばまで、デュッセルドルフとデュースブルクで、25の作品を、230回の上演において指揮した。「蝶々夫人」「ラ・ボエーム」、ヴェルディの「ヴェネツィアのドージェ」「オテロ」、レオンカヴァッロの「エディプス王」、頻繁に指揮したのが「ヘンゼルとグレーテル」、さらに、ミレツカーの「物乞い学生」、リヒャルト・シュトラウスの「ダフネ」、ヘンツェのバレエ「ウンディーネ」、ドリーブの「コッペリア」、ラヴェルの「スペインの時」ならびに「ボレロ」、ヴェルナー・エックの「検査官」などである。オッフエンバックの専門家として、彼は 3

つの初演、すなわち、(一幕劇「小さな魔笛」「カンテラのもとで婚約」「チュリパタン島」から成る)「オフエンバック三部作」、「ホフマン物語」、「美しきエレヌ」の指揮を執った。

体制との闘いの中で

カルロス・クライバーの幼年時代をめぐっては、残酷な父親像のこと、アルバン・ベルクが父親を務めたと言われていることなど、今なお伝説がまとわりついている。加えて、カルロスが父を敬愛しており、父の突然の死は彼にとって衝撃であった。音楽的にも父は彼の模範となった。作曲家の意図したように楽譜に生命を呼び覚まそうと、誠実に努力した父の姿勢に、きわめて納得していたからである。

エーリヒ・クライバーは、ヴィルヘルム・フルトヴェングラーとは対極の指揮者であった。現代風に、高い純度で、非常に精密で透き通った目で、それでいてさらに、常に深く、生き生きとして、情熱的にテンポを効かせて作品を見ることによって、彼は新たな音楽世界を開いた。どんなに天才的才能があっても、つらい仕事と決してたゆむことのない投入なくして、この域に達することはできなかった。この信念を、カルロス・クライバーも我が物とした。そして同時に、自分の心に育まれた理想の音響には、最高の条件下にあっても決して到達しないであろう、という認識も、彼は持っていた。これは、絶え間ない自信喪失と不満の源泉となった。父が編曲した楽譜は、カルロス・クライバーにとって神聖なものであった。同時に、作曲家の原作へ立ち返ることも、彼には義務であった。一つ一つの音符を、彼は細心の注意を払って調べ直した。楽譜を編曲するまで数ヶ月間、彼は一つの作品を研究した。

カルロス・クライバーは当時すでに、オーケストラの一定した割り当て、オーケストラ席での十分なリハーサル時間とリハーサルとを望んだ。しかし、のちになっても、彼は自分の要求を貫徹できないことがたびたびあった。すなわち、申し合わせが厳守されないということを、彼は経験しなければならなかったのである。その帰結として、彼は契約書に署名するのを拒み、芸術上の条件が同意しがたいと思ったときはいつでも、契約を撤回する余地を残した。クライバーのような完全主義者は、劇場の日々の決まりきった仕事においては想定されておらず、頑固な組織の要員の多くからは、全く望まれない存在だった。まさに初期の数年間、彼の仕事のやり方や独断の書き込みを不承不承にしか受け入れなかったオーケストラに、彼は再三再四苦しまねばならなかった。このような見方をして初めて、彼の普通とは違う経歴や、他人にはしばしば実感として理解しがたい態度が理解できるのである。すなわち、彼の狭いレパートリー、わがままとされる拒否、登場回数とレコードの録音数が比較的少ないことが理解できるのである。

魔法の杖を手に

ライン・オペラでは、クライバーが聴衆に火花を飛び移らせることができることが、すぐに明らかになった。良き助言者である音楽監督のアルベルト・エレーデは、クライバーが音楽家として非常に尊敬していた人物だが、彼はエレーデから何曲かの演奏を引き継ぎ、それら演奏を非常に緊張して洗練させた。クライバーがライン・オペラ以上に、オペラ劇場に結び付けられることは二度と再びなく、同僚たちと個人的にこれほど連絡をとり合ったことも、それ以前にはなかった。その地で彼は、ツァゴルイエ・オブ・ザフィ出身のスロベニア人ダンサー、シュタンカ・ブレツォファーとも知り合い、1961年に結婚した。その後、リュブリャナの東にある絵のように美しい山の風景が、彼の第二の故郷になった。彼は家族とともに、ここへ何度も引きこもった。

デュッセルドルフに続く2年間は、チューリッヒ歌劇場だったが、困難な時代であった。シュトラウス(2世)の「ウィーン気質(かたぎ)」、スメタナの「売られた花嫁」、チャイコフスキーの「眠れる森の美女」、ヘンツェの「ウンディーネ」をもって、ならびに「ファルスタッフ」や「ドン・カルロ」やウェーバーの「オベロン」を引き継いで、大きな成功を収めたにもかかわらず、彼は歌劇場で、数人の指揮者の中の一人にとどまった。シュトゥットガルトのヴェルテンブルク州立劇場でようやく、彼はその現状を打開することができた。すなわち1966年には、ギュンター・レンナートの監督でベルクの「ヴォツェック」、1967年には、ヴァルター・フェルゼンシュタイン演出による「魔弾の射手」をもって、成功を収めたのである。しかし、舞台上で適切に移調しようと努力する中で、同じ波長の上にいる舞台監督が身内の中にいないことを、彼は当時すでに痛く嘆き始めたのである。

彼の芸術上の要求がどんな結果をもたらしたか、ということを経験したのは、彼が1966年エディンバラで、「ヴォツェック」を取り消して手痛い騒ぎを引き起こした時であった。(シュトゥットガルトの客演の初演は、彼はまだ指揮したのだが、2回目の上演は病気を理由に取り消した。そのときすでに観客がホールで待っており、代替りの指揮者は考えることは、もはやできなかつた。)クライバーはその間、一人の息子の父となり、のちに娘が一人生まれることになるが、シュトゥットガルト近郊の田舎で、まずはオーバーアイヒェン村で、のちにムスベルクで、世捨て人のように暮らした。比較的親しい私的な接触を避け、楽譜に身をささげ、歌劇場で「リゴレット」「カルメン」「トリスタンとイゾルデ」「エレクトラ」、そして再三再四「ばらの騎士」などの作品を指揮した。

数ヶ月間、クライバーは楽譜の原本について、あれこれと考えをめぐらした。コンサートで最大限の自由を手にするためであった。あたかも魔術のように、彼のエネルギーはオーケストラと聴衆に乗り移り、彼を崇拜する人々は、彼の出演回数が

ますます少なくなる中で（この写真は 1991 年ウィーンにて）、彼をメシアのようにほめたたえた。

メシアを待って

彼の名声はとめどなく増した。マスコミは彼をほめたたえ、彼は国際的に最高報酬で誘われた。1969 年からは、バイエルン国立歌劇場で一連の成功を収めた。ここで彼は 1988 年まで、「ヴォツェック」「ばらの騎士」「こうもり」「椿姫」「オテロ」、その他数え切れないレパートリーを上演して、熱狂的にほめたたえられた。しかし、彼が話題に上った高額報酬の地位はすべて、彼には関心がなかった。ザルツブルク音楽祭でも、彼は決して指揮しなかった。さらに、他人にとっては理解しがたい自己懷疑から、彼があれほどまでに高く尊敬していたモーツァルトを避けたのである。クライバーはその間、ザルツブルクをたびたび私的に訪れており、そこに住居を所有していた。

しかし彼の第二の故郷となったのは、ミュンヘン近郊のグリーンヴァルトで、そこに彼は 70 年代の初めに家を一軒買った。当時クライバーは、他の全ての人々を一回り引き離すように思われ、指揮者の天に輝くスターであり、彼の尊敬の的であったヘルベルト・フォン・カラヤンすら引き離していたのである。1973 年、クライバーはウィーン国立歌劇場において「トリスタン」で、1974 年にはコヴェント・ガーデンにおいて「ばらの騎士」で、そして 1976 年にはミラノのスカラ座において「ばらの騎士」と「オテロ」で、それぞれ初舞台を踏んだ。やはり祖先をあれほどまでに高く尊敬していた彼は、1974 年、バイロイトにおいて（「トリスタン」で）初舞台を踏み、一つの大きな夢を実現した。すでに何年か前に、バイロイトからの申し出を拒否した後のことであった。

クライバーは全世界で指揮した。日本では客演の際に、メシアのように尊敬された。このカリスマ的な花形指揮者を奪い合ったが、それでも彼は名声をほとんど気にかけず、ただ音楽の役に立ちただけである。クライバーは気難しい人物だと評判を立てられたが、鋭い風刺の天分豊かで、知性が高く雄弁な彼は、実はむしろ複雑ではなく、控え目だった。もっとも他人にとっては、よく理解できるというわけには決していかない面もあった。特に彼は、インタビューを頑なに断ったのであるから。人にはばかられた感情の爆発に傾いたのは、オーケストラや歌手が彼に従いたがらなかった時だけである。「しかし私たちは、いつもそうしてきました！」とか「そうは行きません！」といった説明ほど、彼が極度に嫌うものはなかった。試して、試して、試す。あらゆる可能性をテストし尽くす。作品を何度も何度も、新しいやり方で生み直す。これが彼の要求であった。理想を求めて、不断の戦いであった。

「野菜になれたらよいのだが」

彼のレコードの経歴は、短い挿入部にとどまった。1973年にドレスデンで、「魔弾の射手」が感動的に録音されたのち、ほとんど後が続かなかった。すでに1982年、「トリスタン」の録音の後で、彼は仕事のやり方の拙さに失望して挫折し、もはやユニテル会社のいつかの映画製作に移行させるしかなかった。たとえば1983年、アムステルダムのロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団での初舞台、1989年と1992年、ウィーンのニューイヤーコンサートである。記念すべきは1989年と1994年、ベルリン・フィルハーモニーで、当時の連邦大統領リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカーの首唱で、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団とともにクライバーが催した、たった2回のコンサートであった。しかし残念なことに、公式には録音されなかった。

自分自身をも極度に要求するクライバーの仕事の流儀は、異常ではあったが、彼の指揮の流儀もまた、型にはまらないものであり、たびたび抵抗を呼び起こした。クライバーは弦楽器の奏者に、楽譜台ごとに異なる運弓法で演奏させたが、音を出す技術において、彼は信じがたいバリエーションの幅を物にしていた。彼にとって最も重要だったのは、ホールで緊張のあまり、ぱちぱち音がすることであった。彼の演奏の精密さ、透明さ、強弱法、テンポは魅惑するものであり、構成を意識したあれほど多くの指揮者が成し得なかったことが、クライバーの場合、自明のごとく現れた。すなわち、びりびりするような緊張感、表現の豊かさ、そして「魔弾の射手」の狼谷の場面において、魔力的なものにまで高められた詩的で情緒的な深さである。すでに80年代に、クライバーは顔を見せることがいっそう稀になった。90年代にはすでに、すっかり隠遁してしまう徴候が明らかになったが、それはまた、彼の見解では衰退にあるという音楽事業から、ますます遠ざかっていることを反映するものであった。それにもかかわらず、彼は人生を楽しみ、好んでたびたび日本に旅行した。彼は日本が大好きであった。クライバーはあるとき、レナード・バーンスタインにこう語った。「野菜になれたらよいのだが。庭で私に向かって育ち、日光を浴びてすわり、食べて飲んで眠って愛したい。」

1992年に、彼はあるコンサートマネージャーの手紙に、皮肉をこめてこう答えている。「オペラとコンサートの場に居合わせると、私は退屈する。ひょっとしてスーダンとかナゴルノ・カラバフには、上演を聴いても私が眠り込まないようなテノール歌手とか指揮者が育つかもれないが。」1999年、バイエルン放送交響楽団とともに客演旅行したのを最後に、あらゆる指揮者の中で最も長期間にわたって求められた彼は、ついに引退した。次第に年齢と病気も、彼を悩ますようになった。妻シュタンカの死後半年経った2004年7月、スロベニアのツァゴルイエ近郊のコニシツァにある別荘で、クライバーは全く突然に死去した。その地で彼もまた、ひそかに埋葬された。■

アレクサンダー・ヴェルナーは1961年生まれ。文芸学と歴史学を学ぶ。2000年より、バーデン地方の雑誌『見解』と『クリスモン・プラス』の編集長。10月にマインツのショット・ミュージック社から、彼の著書「カルロス・クライバー ある天才指揮者の伝記」が出版される。